

「組合員に役立つ」ために

技術と伝統の組合 現代的な悩みも

屋根や外壁、雨どいの設置、内装や空調ダクトづくり、あるいはキッチンや水回りの工事など、さまざまな金属板を加工する技術で建築現場の広い範囲をカバーし、日常生活にも密着している建築板金。向出伸弘さんが事務局長を務める大阪府板金工業組合は、大阪府内の大小さまざまな「板金屋さん」で構成される。そのルーツは昭和7（1932）年に設立された大阪建築鋳業組合に遡り、70年以上の歴史を重ねる伝統と技能に根ざした組合である。

現在の組合員数は332。平成8年には500を超えていた組合員数もこの十数年で200減、組合員の高齢化も進んでいる。また、業界では雨どいなどの既製品化も進んでいる。しかし、建物の安全性や耐久性を保障するために必要不可欠な板金技術は決して廃れることはないし、長年の経験と技能に裏打ちされてはじめて成り立つ。従来は、その技術と経験は父から子へと継承されて来たが、典型的な3K業種のひとつであり、労働拘束時間も長いなどからご多分に漏れず後継者難が組合員の悩みとなっている。しかも、その事業規模は一人親方など小規

模事業者が多数を占める。その結果、どうしても手の回らない課題が山積みとなる。

「組合員に役立つことをする」をモットーとする向出さん率いる組合事務局は、そういった組合員の悩みや課題解決に当たっていろいろとさまざまな事業や活動を展開している。

組合員の悩みを解消する数々の事業

まず福利厚生事業がある。健康保険や労災保険は必須であるが、小規模事業者は事務手続きなどが後手に回りやすい。労働保険事務組合の認可も受けている組合事務局は、このような保険の制度や手続き面で組合員のフォローにあたっている。また、資材等の協同購買事業によって組合員各社のコスト軽減も図っている。しかし、特に力を入れているのは指導教育情報事業、中でも、各種の人材育成である。昭和28年以來運営を続けている大阪府板金高等職業訓練校は後継者養成、技能工の育成、若手人材の確保に力を発揮している。ここから育った1級板金技能士らによって組合内には大阪府建築板金技能士会という部会が設置されており、後輩たちの技術・技能の向上の支援にあたりている。また、大阪府や府の業界団

体からの要請で、技能士会では小中学校で銅板レリーフの製作指導などを行い、ものづくりの体験学習にも協力している。これらの実績が評価され、平成20・21年の2年度にわたって実践型人材育成養成システム（厚生労働省のジョブ・カード制度における職業能力育成プログラム）普及のための地域モデル事業を実施。組合員企業には若手人材育成とそれに必要な助成金を得る機会となった。同時に、組合としては職業訓練校の訓練生の確保や人材育成・後継者養成システムの確立につながっている。

もう一つ、組合員各社の事業基盤の強化・新事業開発支援にも取り組む。住宅用太陽光発電システムの施工に本格的に取り組めるようにと、太陽光発電パネルメーカーと連携して、組合特別枠の施工ID取得研修会を開催しているのである。

組合でしかできないことを提供する

組合事業はまだまだ多岐にわたり展開されているが、これらは6名の事務局職員によって運営されている。その要である向出さんは文字通り「目の回る忙しさ」の日々を送っているのだが、ご本人は極めて沈着冷静、「忙しいなら忙しいなりにいかに効率的に仕事をこなすか」



と、自ら楽しみながら挑戦しているようにも見受けられる。特に、「どれだけ忙しくても組合・業界外部とコンタクトできる機会は最大限逃がさない」とのこと、幅広い情報収集を行っている。そういうネットワークづくりが先述のメーカーと連携した組合特別枠のID取得研修会にもつながっているのである。

その向出さんが自身も含め職員に求めているのは「組合でしかできないことは何かを常に考え、探して、サービスとして提供する」ことである。「うちの組合員は小規模事業者が多いです。また、組合員数の減少傾向も続く見込みです。それだけに、小さく、かつ、少ないからこそ集まるメリットのある仕組みづくりを目指したい」からである。

そのためには職員の育成も重要となる。ここは現在、着段階と言うのが、自ら自発的に「組合というものを」と知りたい」と勉強して挑戦した組合士の資格は「職員としての基礎づくりには必須」とも位置づけているという。

「組合員のために」を根本に、今後5年10年後の組合のありようなど、長期的な展望にも思いを馳せる日々である。